



体育教師の座標軸

11月4日（水）

本校第52回卒業で第28代校長(1992.4~1995.3)を務められた本橋利美先生の著書「体育教師の座標軸 茨城の優れた体育・スポーツの指導者」は、教育論として現在にも通じる一冊です。著者の本橋先生の考えにも触れることができ、ご本人も偉大な体育教師であることを窺い知ることができます。今回はその中から一部を紹介しますが、図書館にも収蔵されているので是非読んで欲しい本です。

はじめに、より

教育で最も大事なことは、教師が児童・生徒や保護者、地域の人たちから信頼されることである。

その信頼関係を構築するには、教育者としての座標軸を定め、その軸が絶対にぶれないようにして日々の活動を誠実につとめることが大切である。

第一章 茨城の優れた体育・スポーツの指導者「学校体育領域」、より
(1927年から39年間、下妻一高にのみ勤務した緑川三郎先生について)

教えるより導く人（押さば引け、押さば引け、押さば廻れ）

生徒が反発したり、指示に従わないようなときにも、大きな声を出したり、命令的に指示したりはせず、じっくりと時間をかけて、教師の指示通りにすることが正しいことであることを生徒が納得するまで丁寧に説明し導いていく指導法であった。このときの指導は教えるというより導くという感じであった。

第三章 望ましい体育教師を目指して、より

よく教師の中には、過去に担任したり、自分の授業を受けた人を、私の教え子という人がいるが、教わった側の生徒達はどのように思っているのであろうか。歯を磨くということと歯が磨かれているということとは全く別なように、教師と生徒の関係も、教育を受けた方から「私はあの先生に教育され今でも感謝している。あの人は私の恩師です」と言われるような関係が望ましいのである。(中略)

望ましい体育教師とは、心身共に健康で教育者としての強い志を持ち、教育哲学、体育哲学、豊かな人間性を基盤に指導方法論、教材論、教師論を確立させ、かつ、指導者としての確固たる座標軸を持った教師であろう。またこのような教師が子どもたちや保護者、地域の人たちから信頼され、かつ児童・生徒は確実に「生きる力」が身に付き、教え子たちからは恩師と慕われるのではないだろうか。